

草庵仏教

第200号
(発行日)

2007年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○真宗共学会――毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

暗き心に仏の光

「凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて（乃至）、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」（「一念多念文意」）

と、宗祖は、私たちの心はいつも無明煩惱が満ちていると仰せられている。このお言葉は、凡夫の心は本質的に「明るく無い」（無明）ことを示されたものである。

私たちは何かに成功したり、家族の仲がよかったり、恋愛中であつたりすると、心は明るく、事業に失敗したり、病気になるったり、孤独になつたりすると心が暗くなるというような、明るくなったり暗くなつたりするのが人生生活である。

しかし、凡夫の身には煩惱がたえず満ちているかぎり、人生生活上の明暗の全体が暗闇なのではなからうか。太陽の光に比すれば電灯の光やネオンの光は闇と変わらないように、凡夫の心の明るさも、太陽のような仏の光に比すれ

ば暗闇にも等しいといえよう。

自覚していようといまいと凡夫の心は煩惱におおわれているゆえ暗く、もやもやして、それがやりきれないから、いろんな楽しいことや面白いなことをあちこちに追い求めて、「ああ楽しかった」「ああおもしろかった」といつて、何とかして心の憂さを晴らして、少しでも明るくなりたいと思つているのではないであらうか。

*

阿弥陀仏は光明が無量であるといわれている。阿弥陀仏の光明にであうと、もうそれで凡夫の心の闇がなくなるかという、そうではない。仏とのであいの有無や信不信にかかわらず、生涯、凡夫の心は暗いにはあるまいか。いつまでも煩悩や不安やもやもやがとれないのが凡夫の人生であらう。

よく、仏教を信じたら心が明るくなる、仏法を聞くと人生が明るくなるといわれる

が、一応はその通りである。しかしそれは私たちの暗い心が無くなって明るくなってしまふように思うなら聞きまじがいであらう。むしろ生涯、心が暗いからこそ、いつも仏の光りが有用であり、有難いのである。もし私の心自体が明るくなってしまったなら、阿弥陀仏もお念仏もいらなくなる。それはもう凡心ではなく仏心になったといつてもいい。しかしこの世にいる間はそのようなにはならない。

いずれにしても人生生活は無明長夜であるから、その私に「無明長夜の燈炬（たいまつ）」となつて下さるのが南無阿弥陀仏である。南無阿弥陀仏の大きなたいまつがあればこそ「智眼くらしとかなしむな」と仰せ下さるのである。月の光があればこそ闇夜の道も歩けるのである。南無阿弥陀仏の徳は無明長夜の心にこそ用らいてくださる。

妙好人のおその同行のお話に、

《おその同行、ある時、味浜御坊において、夜中に便所へ行かんとして戸惑い、ガタガタしておられた。そこへ光を持って行きたれば、おその曰く、

（ア―暗いとこころにこそ光が御入用であつたかな―、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、念仏もろともお喜びなされたとある。

暗い心を明るうなつてからの御助けというような聞きようは、誠に「信者めぐり」とある。

*

闇の夜でも月の光で明るいのである。「ああお月様はきれいなあ」と月をおおぐように、「南無阿弥陀仏様ありがとう」と南無阿弥陀仏の大悲の光明を讃歎させていただくのである。仏法聴聞によつて、むしろ心の暗さが明らかにになり、いよいよ阿弥陀仏の光明を慕い、南無阿弥陀仏の有り難さが身に浸みるのである。だから「仏法を聞いたから私の心は明るくなりまして」とは単純に言えない。もし言えるとなれば、煩惱の黒雲は厚くかかっていても雲を通して光が入って照らしてくださるゆえ、明るいのである。心の暗闇は、この世のいのちが終わる時、全面的に晴れ、仏の光明と一つにして下さるとの仰せである。（了）

真宗問答(三十一)

五逆と誹謗正法

(第十八願)

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

S 「第十八願は一切衆生を救済したもう阿弥陀仏の誓いを表された願ですが、先月からただ五逆と誹謗正法とをば除く

のところ、〈除く〉という語について、聖人は、〈除く〉という言葉は、阿弥陀仏は五逆や正法を誹謗するような重罪のものを救わないということではなくて、私たちが〈救いから除かれるほどの罪深い存在〉だということをお示し下さる言葉であり、その救われ難き者をこそ救わずにはおかないと、十方衆生の平等往生を誓われたのが阿弥陀仏なのだといわれましたが、そこをもう少しお話し下さい」

D 「実は久遠の阿弥陀仏が法蔵菩薩となつて一人一人を仏陀たらしめたいと願われ、私どもを仏に為したもうための仏因を、長いご修行によって仕上げて下さり、私どもに

〈我が誓いを信じるばかりで助ける〉と働きかけて下さっていること、それを釈尊は無量寿経にお説き下さいました。阿弥陀仏のおん眼に見られている人間は、罪悪深重で清浄真実の全くない存在、そういう人間なるゆえに如来ご自身の力だけで救つて仏にしようとする、私どもには〈そのままなりで助ける〉と仰せ下さるのです。そのお助けの端的が〈我が名を称えよ〉の仰せであり、大経では乃至十念若生者不取正覺のお誓いとなつています」

S 「乃至十念若生者不取正覺は万人を平等に念仏往生で助けようと誓われた願であること、それを法然上人は非常に強調されましたね」

D 「ええ、そうです。〈助け

るで、念仏申せ〉と阿弥陀仏が私たちに喚びかけて下さる。阿弥陀仏がそう喚びかけたもう人間、それは罪悪深重の助かる縁無き衆生であります。その助からぬ者を助けるのお心が〈ただ称えよ〉の仰せであります。ところが〈助けるで念仏申せ〉とまで仰せられ、限らない慈悲をそそぎたもう大悲摂取の仰せを、私たちはなかなか信受しないのです」

*

S 「なぜ、阿弥陀仏のお助けを受け入れないのでですか」

D 「それは私たちがそれほどにまでしていただかなければ助からぬ者であることを知らず、仏法を否定し、仏を無視し、自分の考えに固執し、自らを肯定し、自分で自分を支えようと思っているから、阿弥陀仏が〈助けるから、まかせよ〉と仰せられる大悲を受け入れることが出来ず、受け入れようともしないのです」

S 「仏法を聴けども、受け付けないのですね」

D 「ええ、たとえばお医者さんが難病の患者を治す特效薬を何十年も研究開発して作り、その患者に〈さあこの薬をお飲みなさい、治るから〉

とお勧めになつても、その患者が自分ほど悪くないと思つていたら飲みません。ところが実際は重病人。だからその場合、病氣とも思つていないその患者に、どれほど重い病にかかつているかを知らせねばなりません。〈あなたには難病にかかつていて今のままでは治りませんよ〉と知らさねばなりません。お医者さんの指摘によって自分の病いの重さに気がつき、じゃあ薬を飲もうというようになります。そのように罪悪深重の凡夫であること、救われがたい凡夫であることを知らせたもう言葉が〈ただ五逆と誹謗正法とをば除く〉のお言葉です」

S 「そうするとこの経文は重罪の者は救わないという救いの断念あるいは救いから見放す言葉ではなくて、逆に救いに預からせるための大悲の言葉なのでですね」

D 「ええそうです。〈自分の生き方はまちがつたらん、これで善い〉と、自らのありかたに疑問も痛みも持たない者に重い悪(五逆)のあることを知らしめ、また、真理を否定する罪(誹謗正法)をお知らせ下さるのです」

*

S 「五逆と誹謗正法の関係は」

D 「曇鸞大師は五逆が起る本に誹謗正法があるのだと云われました」

S 「それはどういう意味でしょうか」

D 「誹謗正法とは正法を誹謗するということですが、真実の道理(正法)を無視し、正当な真実の道理を受け入れず、真実を否定しているのです。こうして自分の考えをどこまでも肯定し、自分の生き方を反省することもなく、自分の欲望のままに生きようとすると、さまざまの悪が起こつてまいります」

S 「どう生きるかとかどうかどう行動するかという毎日毎時の判断をする場合にどこまでも自分の都合や欲求や勝手な考えだけで判断し、まことの道理はあれどもそれを無視する(誹謗正法)、そういう処から日々悪が起こつてくるのですね」

D 「そうお聞きしています。自分の利益にとつて都合の悪い人があれば、その人を邪魔に思い、相手の存在を否定しようとする。それが高じて傷害や殺しにまでなつていきま

正当に与えられないものまでも得ようとす（偷盜）。また自分の欲望を満たそうとして、不倫（邪淫）をしたくない。

あるいは自分の利害に關係すると嘘をいい、へつらい、ごまかす。これが妄語の悪になりましょう。こうしていろいろ悪が起り、しかもそういう自分の悪を悲しみ痛むこともない。へ自分のどこが悪い」とすら思っている。だから何時までも悪がやまないのです。こうしたあり方の元に真実を聴くことがあってもそれを受け入れず、真実のあり方によって自分を省みることもしない、そういう真理否定の姿が根本にあります。それで五逆という反道徳のもとに誹謗正法という反真理があるといわれるのであります。

「自分の都合を中心にして生きようとすその本に、真実のあり方を聴くことがあっても教への権威を認めず、軽んじ、受け入れようとしませんがたがあるのですね。こうした有様は現代に一般的ですね」

「ええ、それは特別な人の姿ではなくて、いたるところこれではないでしょうか。」

「本人自身に痛くもかいくもないですから、これが止むことがありません」

「誹謗正法を誹謗しているとも知らないから、いつまでたっても正法に帰することがないのですね」

「そうですね。だから私たちに真理を否定し続けている罪を知らせる、そのことによって正法に帰順せしめようとするのが、このへ」

「ただ五逆と誹謗正法とをば除く」の仏語であります」

「誹謗正法が自分の姿とはなかなか感じられないのですね」

「ええ、そういうことを聴いても私たちはそれをなお人ごとに聴いている。自分の事ではない、そういうのは他の人たちのことだと」

「自己否定するのはどこまでもいやな私たちですね。そういう誹謗正法をしていながら、しているとも知らない私たちにその罪を知らしめてくださり、正法に順う者に導かうとされるのが仏陀の言葉なのです」

「ええ、そしてこの誹謗正法というのは仏教に帰依しない人だけのことではありません。帰依している私たちの姿でもあります」

「誹謗正法の罪は仏教を聴いている現在の私たちの姿でもあるのです」

「ええそうです。むしろ佛法を聴くと云うことは自分がいかに誹謗正法を続けてきたか、しかも今もその罪ゆえに佛法を軽んじ、仏様の言葉を本当だと心から受け入れず、自分の考えや思いをつのり、邪見・慢のなかにあることを知らされるのです」

「誹謗正法とは私自身の過去だけでない現在の姿なのですね」

「ええ、佛法を聴いても聴いても受け入れない、はねつけてばかりいる。それゆえ私の心がいつまでも佛法によって教化されない、実に無佛法の人間であり、それこそ救われたい人間であると知らされるのです」

「なるほど、自分は反佛法の者だと」

「ええ、それゆえ自分は助かる縁も何もない人間だと知らされる。助からぬ人間であり、はてしない暗黒に自身身を落とそうとしている人間

であるとして下さる。それが「ただ五逆と誹謗正法とをば除く」の仏語でありましょう。（地獄は一定すみかぞかし）との宗祖の仰せも宗祖だけの事ではないですね。我が身のことであり、そういう暗黒に入っていくしかないような反佛法の人間をどこまでもおつかけて「そんなお前を見捨てない、引き受ける」と仰せ下さる南無阿彌陀仏様と知らされるのです」

「阿彌陀仏は（助からぬ者を助ける助けたもう）大悲だとお聞きしたことがあります」

「ええ、阿彌陀様が（助けるで、我をたのめ）と仰せ下さるのは、助かる資格もない、いな佛法に背き続けてきた私を、あきれもせず、見放しも

せず、どこまでも寄り添って下さり、（そんなお前だから助けずにはおかない、引き受けずにはおかない）と撰取したもう南無阿彌陀仏様であります。誹謗正法で無窮の闇にすべりこんでいかねばならない私に、誹謗正法の危なさ・罪深さを知らせて下さり、その誹謗正法の者に（我が名を称えよ）と撰取の手をさしおべて下さるのであります」

「へただ五逆と誹謗正法とをば除く」という仏語にはそういう意味があるのです」

「そうですね」

（了）

《春季彼岸永代経法要》

三月二十二日（木）

午後二時始まり

念佛寺仏間にて

信仰夜話

Sさんから信仰上のお便りをいただきました、その中に

①「どうも本願を理屈ばかりで受け取ろうとしていた様な気がします。念仏は弥陀の呼び声だと言われれば、称えながらこれは如来様のお呼び声であると思おうとしたり、仏様の御慈悲を声を通して受け取ろうとしたり、南無阿彌陀仏が助けに来て下さった阿彌陀様だと思おうとしたり、兎に角聞いた言葉の通りに自分を当てはめていこうとばかりしてしまいましたので、何となくそんな気になる事があっても全く続かない、返ってしんどくなるばかりでした」とのお便りをいただいた。このお便りに対するコメントとして、およそ次の様にご返事を書きました。

「本願を聞いたら、その本願の通りに「思いたい」と本願をつかみにかかり、念仏を称えようと、「これは阿彌陀様の呼び声だと感じたい、思いたい」と、どこまでも「聞いた言葉の通りを受け取る自分になろう」とばかりするのです。

「どうにもならない汝のそのままなりを救う」と仰せ下さるのに、「このまま助かるのだと思いたい」「このままのお助けと受け取りたい」となっ

て、このままで助けていただかず、「助かると感じる私になろう」「助かると信じる私になろう」と、どうしても「なるうなるう」とするわけです。いわゆる「こちらからどうかなって助かろう」とかかるとは。

こちらから助かろうと計らうから、阿彌陀様が「助からぬ汝をそのままなりで助けさせてくれよ」の大悲心が通らないのです。

本願を聴いても、あるいは念仏を称えても、その時は何か有難いと思ったり感じたりしてもそれは長続きはしません。それで、何とか「有難く思いたい」「分かりたい」「信じたい」と、こちらからそうした確かなものや手応えをつかみたいのです。いつかは確かになる、いつかは信じられる、いつかは分かると思っても何年も聞法念仏するのですが、いつまでたっても元の木阿弥の自分が残るのです。

実は、こういうことは聞法念仏の歷程には必ずといっていいほど、この道を経るのではないでしょう。本当に、いやというほどそれを繰り返すのであります。

(なんとかなろう)という自力のほからのありだけを重ねて、もうまったく「助かる縁も手がかりも塵ほどもない自分」「本当にお助けからは全く除かれた存在」「無仏法無信心の私」が残るのです。それが私の動かぬ生地なのです。

このような私をすでに阿彌陀様はちやんと知り抜いてくださっての仰せが(まるまる引き受ける)というまるまる助けの仏心であり、口に聞こえる南無阿彌陀仏なのです。

多くの人の聞法は、そこまで随わずに、途中で小さな経験とか納得とか分かったこととかに腰を下ろして「これでよい」としてしまふのです。それで本願の救済が私にとどかないのです。

*

②続けてSさんの便りには「称我名字というのは如来様の有無を言わさぬ命令なのではなからうか。別に有難くもないし、信心もないが、兎に角称えよの勅命だからやらざるを得ない」とありました。これに対して、

「親鸞聖人が十八願文の「乃至十念・若不生者・不取正覚」について、「この誓願は、すなわち易往易行のみちをあらわし、大慈大悲のきわまりなきことをしめしたまうなり」と申されてますように、乃至十念いわば称我名字は、単なる有無を言わさぬ命令ではなくて、大慈大悲のおこころの表現なのであります。無仏法無信心、反仏法の私を「まるまる引き受ける」との勅命、仏道成就の力のない私に仏道成就の身代わりになりたもうての仰せが、称我名字(我が名を称えよ)の仰せであり

ましよう。その大悲を「称我名字」の仰せに聞くばかりであります。私の行いとしては念仏を称えているのですが、称えていることに力が入っているのではなくて、称えているまま「称我名字」と仰せ下さる阿彌陀仏のまごころに濡れるばかりであります。きわまりのない大悲をお聞かせていただくのであります。

*

③Sさんの友人に宗教的あるいは霊的なレベルの高い人たちがいて、自分などはまったくそういう上等の人間ではないと述べておられ、そのご返事に、

「霊的感性とか宗教的感性の勝れた人というか、そういうレベルの高い人もあると思います。ただそういう自分の感性で感じた感動とか感激とかはともするとそれにとられやすく、「これでこそ」と自分の宗教的あるいは霊的な経験や感動を救われたしるしにして、たのみにしたたりしようとする事が多々あるように思います。」

そうすると、「弥陀に全面的にたすけていただくばかり」ではなくて自分の感動や感激で助かろうとし、それを助かった証拠にしようとしかねません。

そうになると、その救いは個人的なものになりますし、またそういう感激や感動は必ずしも長続きがせず色あせてしまうことになって、やがてまた道が分からなくなってしまう事にもなりま

しよう。

むしろ、そういう靈的感性や宗教的感性がない私は、全く助かる種も、仏法的な色もない、空っぽの素凡夫。それであればこそ、もうまったく「弥陀に助けられるばかり」、「阿弥陀様ばかり」よりほかに助かるすべはありません。

もし何か仏法的なものとか宗教的な素質とか感性とかが私にあるとなると、それをたのんだり、あてにしたり、期待して、ついには弥陀を憑（たの）まずに終わってしまいます。

私の方にそういうものが一切合切ないから、いやたとえ多少あったとしても、それは何の力にも役にもたたない、全くの泥凡夫だからこそ、そんな私に「我が名を称えよ」のなさげがかかっているのではありませんか。素凡夫は阿弥陀様にまるまる引き受けていただくほかに道はないのであります」

(了)